アレキサンドリアからの手紙 ⑤

（E-JUST : Egypt-Japan University of Science and Technology）

大阪大学大学院工学研究科
電気電子情報工学専攻教授
河　崎　善一郎

7. E-JUST 第一期生

この春3月（2012年3月）、我がE-JUSTは、めでたく第一期の卒業生を輩出しました。卒業生は、電子通信工学専攻の修士課程修了者6名と、メカトロ工学専攻の修士課程修了者5名の合計11名です。そして彼等全員が、博士課程に進学の予定です。この様に第一期卒業生の総数は確かに少ないですが、「なんだ、大層に言っても、たったの11名か！」と、呆れ無いで頂きたいのです。というのも、日本が西洋型の教育を導入した際の明治初期、工部大学校（現在の東京大学工学部の前身）の第一期生の数も大差なかったからですし、エジプトと日本が二国間協定で進めている「世界に冠たる大学を創ろう」という企画も、始まってまだ間もないものですから・・・。いずれにしても、ようやく歩き始めた大学の第一期生、彼等が社会に出て活躍し、さらにはこの国エジプトの礎となって欲しいものです。そして100年後にもこの大学E-JUSTが存在し、高い評価を得ている様にと期待しています。

さて、私が長期赴任を開始しましたのは2010年の9月です。開学そのものはその前年の9月で、その時10日間程アレキサンドリアに出張して、開学関連の行事にも参加、併せてエジプトの友人達と開学・開講のためのカリキュラムの最終打ち合わせをしました。そして大学院修士課程と博士課程学生の募集を決定、開講はその半年遅れの2010年春学期2月からとなった次第です。開学とはいえ校舎もまだありませんでしたので、Soft Openingといういわばエジプト独特（？）の開学法で、講義や研究の出来る体制の整った専攻から、逐次募集を開始するというやり方に加え、校舎そのものは大学建設予定地の近くにあった住居用の集合住宅14棟に間借りするという、まさに走りながら考えるという、考え様によっては少し恐ろしい船出でした。

そもそもE-JUST開学の準備は、7つの専攻（電子通信工学、計算機科学工学、環境エネルギー工学、化学石油工学、メカトロ工学、材料工学、経営工学）を念頭に始められました。前回にも書きました様に、私は電子通信と計算機科学の両専攻をまとめた、電子通信計算機科学工学学類の学類長アドバイザーとして関わっておりましたので、日本側幹事校の九州大学（電子通信工学専攻担当）や早稲田大学（計算機科学工学専攻担当）の諸先生やエジプトの教員予定者の先生方と協力して、大学院修士課程や博士課程のカリキュラム作りに奔走したものです。その甲斐あってというべきでしょうか、私の関わる電子通信工学専攻が、先に述べた2010年2月の大学院開講にこぎつけたのです。なお同じ時期にもう一専攻、メカトロ工学専攻も開講、いの一番はこの二専攻となりました。

ここでE-JUSTに入学してくる修士課程や博士課程学生諸君について、説明をしたいと思います。修士課程学生と申し上げますと、読者の皆様は20歳台の青年を想像されるでしょうが、ここエジプトでは殆ど30歳代です。おまけに17ある国立大学の、助教の職についている場合が圧倒的に多いのです。さらに申し上げねばならないのは、彼等は工科系の学部を5年かけて卒業している事。そして卒業時の成績が上位5番以内と優秀で、卒業と同時に日本でいう助教の職を母校で得ているという事です。そもそもエジプトの国立大学は、入学要件さえ満たせば誰でも入学でき、授業料は全く不要なのです。先ほど申し上げました様に工科系は年限5年ですが、6年以上かける学生も特段不利を被らないものですから、大学の学生数はどんどん多くなり、例えばカイロ大学など、学生総数が25万人といったマンモス大学になっております。余談ながら、そんなマンモス状態が常態化しておりますから、受講生が200、300名といった講義も少なく無い様です。ですからその弊害を全く持たない少人数教育を目指してE-JUSTが始まったというのが、実際のとこ

ろです。些か過剰に表現することを許して頂くなら、E-JUST を成功させて、エジプトの高等教育の在り方を抜本的に変えようという壮大な目論見が根っこにあるのです。

ついつい話がそれてしまいますので本題に戻します。工科系の学部は年限５年と申し上げました。一方理学系の学部は、年限が４年となっており、ここエジプトでは工科系の方が高くランクされております。ですから E-JUST への進学要件として、工科系の大学卒業生であることが課せられております。早い話、理学部が工学部より一段低く見られており、我々日本人の感覚からは、如何にも理解し難い制度ですが、エジプトの方々は至極当然と受け取っていらっしゃいます。そして国立大学の若手助教で、工科系学部の卒業生が E-JUST を受験し合格しますと、国立大学に在職のまま修士課程あるいは博士課程学生へと入学してくるという仕組みになっています。それも高額の奨学金を支給されてです。当然のことながら、17 国立大学にも修士課程、博士課程がありますし、マンモス化した大学の講義を受け持っているのですから、合格学生の内何人かは、自身が所属する大学の許可をとる事が出来ず、進学の断念を強いられることも稀ではありません。というのも E-JUST の授業料は、年間 10,000 ドルを超しますので、支給される奨学金（授業料＋生活費）無しではとてもやっていけませんし、所属する大学の命令に背くという事は失職を意味しますので、泣く泣く断念しているといったところでしょうか。

１月半ばに、こんなことがありました。ちょうど 2012 年春学期の入学試験と面接試験があった日の午後の事です。キャンパスを歩いている博士課程受験生に偶然出会いましたが、今春修士課程を修了した私の専攻の学生と一緒でした。私が「なんだ君達知り合いなの？」と声をかけますと、修士課程学生が「二人ともタンタ大学からです。」と答え、さらに「タンタ大学では、私の先生でした。でも２月からは同級生になるかも判りません。私は博士課程に進学しますし、先生も今日面接試験を受けた様ですから。先生の面接試験どうでした？合格しますよねぇ。」と、尋ね返してきました。彼等、先生と生徒が出身大学では同年代、こんな実情を紹介すれば、明治初期の日本の大学事情を彷彿として頂けるのではないでしょうか？

今日の報告の最後は、修士論文の審査会の様子です。修了予定者の持ち時間は、銘々１時間で、30 分が発表、残り 30 分が質疑応答です。試問するのは学内外の４名の教授、司会は指導教授で発表者が窮したときには助け船を出す事ができますが、原則中立です。ですからオフェンス４名に対し、ディフェンスは本人だけという、まぁ当然と言えば当然な形態です。４名のオフェンスには、一週間程前に修士論文が手渡され、厳しい質問を準備しておく様に依頼されます。それゆえ、発表が終わりますと、オフェンスの教授が一人ずつ指名され、質疑応答を行います。こんなですから、修士修了予定者は試されているのですが、オフェンスの教授も試されている様なものです。私は今春の電子通信工学専攻修了者６名の内４名のオフェンスを担当いたしました。

興味深かったのは、質疑応答が終わると、指導教授とオフェンスだけが会場に残され、早速審議にかかった点です。まぁここまで来ると合格することはほぼ間違いありませんが、それでも答え方が適切でなかったとか、論文の展開に無理があるとかいった批判が出たりします。そして最終的に合格と判定が下りれば、再び発表者が招き入れられ、審査員が全員立ちあがって指導教授が、「あなたの修士論文は、合格と認められました。おめでとう！」といささか芝居がかった態度で祝福し、審査員たちは拍手で発表者の合格を祝います。日本ではこの手の儀式はありませんから、参加していて新鮮な気が致します。

いずれにしても、第一期の修了生がこうして次の一歩を踏み出していったといった次第なのです。

（通信　昭和 48 年卒　50 年修士　53 年博士）